

高齢者看護施設実習における高齢者の健康と

生活の自立のための支援についての学び

ーテキストマイニングによるレポート分析からー

切明美保子 辻村史子

要 旨

本研究は、A 大学看護学科 3 年生 49 名の高齢者看護施設実習の課題レポート「高齢者の健康と生活の自立のための支援のあり方」をテキストマイニングで分析し、指導の示唆を得る目的で行った。分析の結果、高齢者の健康と生活の自立のための支援についての学びは、「高齢者に合わせたコミュニケーション」「尊厳を守る」「高齢者の特徴に合わせた援助」「残存機能の維持・向上を図る」ことが大切であること、また看護の役割を果たすためには、「多職種と連携」「知識技術を身につける」の 6 カテゴリーによって構成されていることが明らかになった。しかし、生活自立の支援のための環境調整や認知症高齢者とのコミュニケーションの困難については出てこなかった。よって、今後は、体験と知識を結びつけることができるようにかかわり、学びを言語化していけるように指導していくことが必要と考える。

キーワード：高齢者看護学実習 高齢者介護施設 学生の学び テキストマイニング

I. はじめに

わが国は少子高齢化が急速に進み、2019 年度には高齢化率は 28.4%になっている。今後高齢化率は上昇し続け、2065 年には国民の約 2.6 人に 1 人が 65 歳以上の者となる社会が到来すると推計されている¹⁾。それに伴い、介護を要する高齢者への介護問題が大きな課題となっている。

一方、若い世代の看護学生は、社会の変化や核家族化により高齢者と交わる機会が減少しており、高齢者を理解する機会が少なくなっている。高齢者に対するイメージが看護に取り組む姿勢形成の源であり、看護の質や内容を決めるといわれている。このことから、高齢者のイメージを深めることが非常に重

要であり、各校で授業が工夫されている。高齢者施設で行われている老年看護学実習の学びについては、高齢者施設の理解や高齢者の特徴の理解、高齢者観の発展につながっていたと報告されている^{2~4)}。

A 大学では、高齢者看護学実習 I を介護老人保健施設と介護老人福祉施設で、高齢者介護施設の理解と高齢者の特徴の理解を中心に行っている。高齢者看護学実習 I の課題レポートから学生の学びを明らかにし、学生への指導方法の示唆を得ることを目的とする。

II. 研究目的

高齢者看護学実習 I の課題レポート「高齢

者の健康と生活の自立のための支援のあり方」を分析し、今後の指導方法の示唆を得ることを目的とする。

Ⅲ. 対象および方法

1. 対象

A大学看護学科3年生で、高齢者看護学実習Ⅰを履修した59名のうち、本研究に同意が得られた49名(83.1%)の課題レポート「高齢者の健康と生活の自立のための支援のあり方」を研究対象とした。

2. 高齢者看護学実習Ⅰの位置づけ

カリキュラムは2年次春学期に高齢者看護学概論、2年次秋学期に高齢者看護援助論、3年次秋学期に高齢者看護学実習Ⅰ(45時間1単位)を行う。その後病院で高齢者看護学実習Ⅱを行う。

高齢者看護学実習Ⅰは、「高齢者の発達課題及び心身の特性、健康レベルの多様性について理解し、慢性疾患や障害を持つ高齢者の健康と生活の自立を支援するために必要な基礎的能力を養う」ことをねらいとしている。実習目標は、「1. 介護老人保健施設・介護老人福祉施設及び関連施設の概要を説明できる」「2. 施設における看護職の役割と多職種連携の重要性を説明できる」「3. 施設を利用している高齢者の加齢の変化に応じたコミュニケーションがとれる」「4. 施設で生活している高齢者の特徴について説明できる」「5. 施設で生活している高齢者の健康と生活の自立を高める支援のあり方を理解する」である。実習場所は、介護老人保健施設と介護老人福祉施設のいずれかで5日間行う。受け持ちを持たない実習である。この実習は、専門看護領域実習の始まりに位置している。

3. データ収集期間

2019年10月～12月

4. データ収集方法

実習後に提出された課題レポート「高齢者の健康と生活の自立のための支援のあり方」

中から、研究に同意が得られた学生のレポートを回収し、テキスト化した。

5. データ分析方法

データ分析は、Text Mining Studio 6.1(以下TMS)を使用した。テキストデータをTMSで読み込み、「分かち書き」を行った。分析を進める場合に同一単語として扱いたい単語のグループを決める作業である類義語辞書を設定した上で「分かち書き」を行なう作業を繰り返した。その後、テキストマイニングの手法により、品詞別出現回数をカウントする「単語頻度分析」、単語の主語や述語などの文法構造にもとづいた関係性をカウントする「係り受け頻度解析」、テキストに出現する係り受け表現の出現回数を抽出し、定量的な分析を可視化できる「ことばネットワーク分析」を行った。

6. 倫理的配慮

本研究の目的・方法、結果の公表や倫理的配慮についての説明を口頭と文書で行い、協力を得た。特に研究への協力は自由意思によるものであり、参加の有無や撤回は成績評価に影響しないこと、得られたデータは個人が特定されないようにコード化し研究以外で使用しないこと、データ分析は成績評価が終了してから行うことを説明し、書面で同意を得た。

本研究は、八戸学院大学・八戸学院短期大学部研究倫理審査委員会の審査承認を得て実施した(承認番号19-10)。

Ⅳ. 結果

1. 基本情報

レポートの記述総行数は432行、1行の平均文字数は27.5文字、延べ単語数は2621、単語種別数は842であった。

2. 頻出語

レポートの中で頻出している単語は、「高齢者」(159)が一番多く、「援助」(68)、「支援」(38)、「必要」(32)、「生活」(31)、「つな

表1 頻出語(上位70まで) 一覧

	単 語	頻 度		単 語	頻 度
1	高齢者	159	36	観察	10
2	援助	68	37	人らしい	10
3	支援	38	38	尊厳	10
4	必要	32	39	やる	9
5	生活	31	40	見守る	9
6	つながる	27	41	生きがい	9
7	行う	27	42	生活+できる	9
8	重要	27	43	尊重	9
9	特徴	27	44	配慮	9
10	維持	25	45	本人	9
11	合わせる	24	46	QOL	8
12	大切	24	47	求める	8
13	連携	22	48	思い	8
14	コミュニケーション	20	49	守る	8
15	残存機能	20	50	情報共有	8
16	自立	20	51	信頼関係	8
17	健康	19	52	身	8
18	看護師	18	53	大事	8
19	向上	18	54	安全	7
20	ADL	16	55	希望	7
21	考える	16	56	自立支援	7
22	とる	15	57	状態	7
23	施設	15	58	職種	7
24	把握	15	59	対応	7
25	持つ	13	60	能力	7
26	提供	13	61	変化	7
27	家族	12	62	役割	7
28	多職種	12	63	力	7
29	アセスメント	11	64	感じる	6
30	合う	11	65	関わる	6
31	自分	11	66	機能	6
32	自立度	11	67	自尊心	6
33	知識	11	68	情報	6
34	良い	11	69	食事	6
35	環境	10	70	心	6

がる」(27)、「行う」(27)、「重要」(27)、「特徴」(27)、「維持」(25)などの順であった(表1)。※()内の数字は頻出回数を表す。

3. 係り受け頻度

テキストに出現する係り受け表現の出現回数を抽出する係り受け頻度で高いものは、

「コミュニケーションーとる」(10)「高齢者ー健康」(10)「残存機能ー維持」(9)維持ー向上」(8)「援助ー行う」(8)「多職種ー連携」(8)「QOLー向上」(6)「生活ー自立」(6)「尊厳ー守る」(6)「ADLー維持」(5)「支援ー行う」(5)「自立ー支援」(5)「身ーつける」(5)「人ー合う」(5)「特徴ー理解」(5)などであった。

※()内の数字は頻度を表す。

4. ことばネットワーク分析と原文の内容

記述された言葉のつながりを見るために、係り受け関係の構造について頻度4回以上でことばネットワークを作成した(図1)。

その結果、A【高齢者の特徴に合わせた援助】、B【残存機能の維持・向上】、C【多職種と連携】、D【知識技術を身につける】、E【尊厳を守る】、F【高齢者に合わせたコミュニケーション】の6つのグループから成り立っていた。

ことばネットワークから抽出された6つのグループの原文について、内容の抜粋を表2に示した。

A【高齢者の特徴に合わせた援助】では、「高齢者」から「健康」「合う」「合わせる」に、「ペース」から「合わせる」、「健康」から「生活」「自立」「支援」「行う」、「援助」から「必要」「提供」「行う」に向けて関連がみられた。原文を見ると“高齢者の身体的・心理的・社会的な特徴をつかんだ健康管理が必要である”“高齢者のその日の体調や意思に合わせたケアを行う”など、高齢者の身体的、心理的・社会的な特徴を理解し、その特徴に合わせたアプローチの必要性について記述されていた。また、“利用者の見ている世界に目線を合わせて、その世界を理解することが大切である”“生活習慣と活動性、本人の希望などを総合してアセスメントし、その人にあった健康のあり方を探さなければいけない”など、高齢者一人ひとりの健康について考えていくことの必要性について、“物事を決めてもらうのも本人の意思を確認する高齢者の価値観や思いをふまえることの大切さが記述されていた。

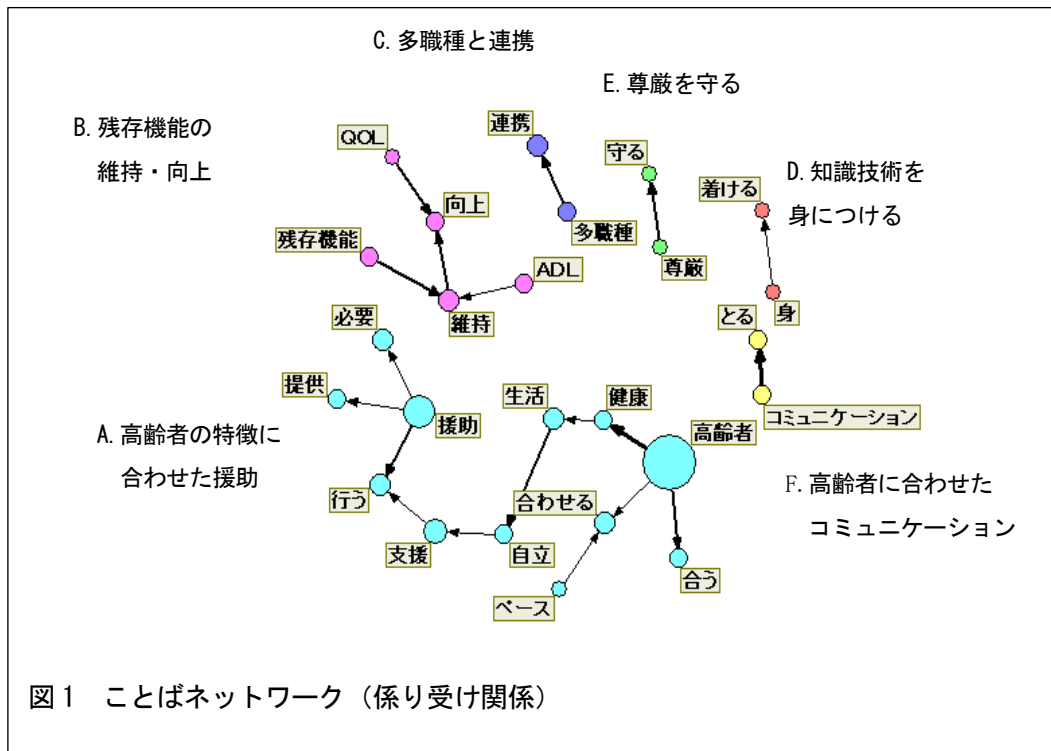


図1 ことばネットワーク(係り受け関係)

表2 ことばネットワークから抽出された6つのグループについての原文の抜粋

グループ	原文の内容（抜粋）
A. 高齢者の特徴に合わせた援助	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の身体的・心理的・社会的な特徴をつかんだ健康管理が必要である。 ・高齢者のその日の体調や意思に合わせたケアを行う。 ・利用者の見ている世界に目線を合わせて、その世界を理解することが大切である。 ・生活習慣と活動性、本人の希望などを総合してアセスメントし、その人にあった健康のあり方を探さなければいけない。 ・“物事を決めてもらうのも本人の意思を確認することも自立支援につながる。
B. 残存機能の維持・向上	<ul style="list-style-type: none"> ・少しでもできることを自ら行えるようにすることが、安楽で満足感が高くQOLの向上につながる。 ・残存機能を持てる力として、強みとして生かしていくことが大切である。 ・持っている力を最大限引き出すことが高齢者の満足感・QOLの向上につながる。 ・本人の希望を叶えることや、趣味活動を充実させることでQOLの向上になり、健康増進につながる。
C. 多職種と連携	<ul style="list-style-type: none"> ・施設内の多職種とより多く細かく情報共有することで利用者一人一人に合ったケアができる。 ・看護師は指導力が求められ多職種と情報共有や連携していく必要がある。 ・利用者それぞれの価値観や考え方を理解したうえで最善のケアやかかわりを多職種で連携して行う。 ・看護師は、多職種と連携をとって高齢者により良いケアを提供し、生活を支える。
D. 知識技術を身につける	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の要望や周囲の環境をよく観察し、そこから高齢者の背景や生活習慣につなげて考える力をつけていきたい。 ・高齢者一人ひとりのできる事できない事の観察をしていき、判断する能力を身につける。 ・利用者の生活習慣、家族背景を踏まえての観察する力を身につける。 ・援助者はケアの基礎をしっかり身につける必要がある。 ・臨機応変に対応できるような知識や技術を身につける事が必要と思った。
E. 尊厳を守る	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者の性格や思いを把握した上で声掛けや対応をしていて、利用者の尊厳や自尊心を保つことが大切と考える。 ・利用者のペースに合わせて一日の援助を行うことで、尊厳を守り、意欲の向上につなげられる。 ・個々に自立してできることを見つけることで、高齢者の尊厳を守っている。 ・身体拘束は尊厳を奪うと捉えることが多いがこの拘束のおかげで尊厳が守られる場合もある。
F. 高齢者に合わせたコミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションをとることでその人のことが理解でき、援助につなげることができた。 ・常にコミュニケーションをとることで些細なことにも気づくことができる。 ・利用者の世界に目線を合わせてコミュニケーションをとる。 ・コミュニケーションをとることによってその人のことが理解でき、援助につなげることができた。 ・利用者とのコミュニケーションでは、聞き取りやすい言葉でゆっくりはっきり低い声で話すという高齢者との基本的なコミュニケーション方法に加えて、ひとりひとりに応じた方法の工夫や配慮が必要であることを学んだ。 ・笑顔で接するという事は、信頼関係や快適な空間になる。 ・コミュニケーションをとるには背景等を把握してからでないといけない。

B【残存機能の維持・向上】では、「残存機能」と「ADL」から「維持」へ、「維持」から「向上」へ、「QOL」から「向上」へつながっていた。原文では、「少しでもできることを自ら行えるようにすることが、安楽で満足

感が高くQOLの向上につながる”“残存機能を持てる力として、強みとして生かしていくことが大切である”“持っている力を最大限に引き出すことが高齢者の満足感・QOLの向上につながる”“本人の希望を叶えること

や、趣味活動を充実させることでQOLの向上になり、健康増進につながる”などの記述があり、高齢者の希望を叶える、生活の中でできることは高齢者自身が行うことができるように支援することが健康増進につながることで、残存能力を活用することや持てる力を引き出すことがQOLを向上することに繋がりその人らしく生きていくことに繋がる、ということが記述されていた。

C【多職種と連携】では、「多職種」から「連携」へつながっていた。原文で見ると、“施設内の多職種とより多く細かく情報共有することで利用者一人一人に合ったケアができる”“看護師は指導力が求められ多職種と情報共有や連携していく必要がある”“利用者それぞれの価値観や考え方を理解したうえで最善のケアやかかわりを多職種で連携して行う”など、多職種と情報共有し、高齢者の理解、異常の早期発見や必要なケアを検討することや協働して一貫したケアを提供することが大切であることの記述があった。また、“看護師は、多職種と連携をとり高齢者により良いケアを提供し生活を支える”などから、高齢者がその人らしい生活を送るためには、高齢者に合わせた個別的なケアを多職種が連携して提供していくことが大切であることが記述されていた。

D【知識技術を身につける】では、「身」から「着ける」へつながっていた。原文を見ると“家族の要望や周囲の環境をよく観察し、そこから高齢者の背景や生活習慣につなげて考える力をつけていきたい”“高齢者一人ひとりのできる事できない事の観察をしていき、判断する能力を身につける”“利用者の生活習慣、家族背景を踏まえての観察する力を身につける”“援助者はケアの基礎をしっかり身につける必要がある”“臨機応変に対応できるような知識や技術を身につける事が必要と思った”など、看護を提供するためには、高齢者の状態を適切に観察し確かなアセスメ

ントができるための知識と技術を身につけることが必要であると記述されていた。

E【尊厳を守る】では、「尊厳」から「守る」へつながっていた。原文では、“利用者の性格や思いを把握したうえで声掛けや対応をしていて、利用者の尊厳や自尊心を保つことが大切と考える”“利用者のペースに合わせて一日の援助を行うことで、尊厳を守り、意欲の向上につなげられる”“個々に自立してできることを見つけることで、高齢者の尊厳を守っている”など、高齢者の意思を尊重し、利用者のペースに合わせ、快適で充実した生活が過ごせるように援助することが大切であるとの記述があった。また、“身体拘束は尊厳を奪うと捉えることが多いがこの拘束のおかげで尊厳が守られる場合もある”など、身体拘束が尊厳を損なうため、拘束しない援助から、高齢者の尊厳を守り自尊心に配慮した関わりが大切であると学びを述べていた。

F【高齢者に合わせたコミュニケーション】では、「コミュニケーション」から「とる」へつながっていた。原文では、“コミュニケーションをとることでその人のことが理解でき、援助につなげることができた”“常にコミュニケーションをとることで些細なことにも気づくことができる”“利用者の世界に目線を合わせてコミュニケーションをとる”など、高齢者その人を理解するためのコミュニケーションの重要性や、コミュニケーションで知り得たことから援助につなげることの大切さについて学んでいた。また、“利用者とのコミュニケーションでは、聞き取りやすい言葉でゆっくりはっきり低い声で話すという高齢者との基本的なコミュニケーション方法に加えて、ひとりひとりに応じた方法の工夫や配慮が必要であることを学んだ。”“コミュニケーションをとるには背景等を把握してからでないと難しい”など、高齢者の状態に合わせた工夫の必要性についての記述があった。

V. 考察

高齢者看護学実習Ⅰの課題レポート「高齢者の健康と生活の自立のための支援のあり方」を分析した結果、学生の学びは【高齢者の特徴に合わせた援助】【残存機能の維持・向上】【多職種と連携】【知識技術を身につける】【尊厳を守る】【高齢者に合わせたコミュニケーション】の6つのグループによって構成されていることが明らかになった。

【高齢者の特徴に合わせた援助】では、頻出語からも「特徴」「アセスメント」が挙がっており、高齢者の身体的、心理的、社会的特徴を理解しアセスメントすることや援助することが大切であることを理解している。さらに、高齢者を一つの集団と考えるのではなく、一人一人の社会背景や健康状態、思いなどを総合してアセスメントし援助にあたらなければならないことを学んでいた。

【残存機能の維持・向上】では、頻出語に「ADL」「自立度」等も挙がっており、機能の低下による生活障害に対して、高齢者の持つ力を引き出しながら、健康や生活機能を維持できるようにかかわることについて学んでいると考える。

高齢者看護では、高齢者の持つ力を最大限に引き出し、それを発揮できるよう自立に向けた支援を行うことにより、高齢者の生活の質向上をめざす⁵⁾ことが目指すべき目標の一つである。また、高齢者は解消できない身体機能や構造上の制約はそのままでも、生活機能全体の向上が図られ、健康的な生活を送ることができるように、個人のプラス面や環境面への働きかけが大事である。しかし今回の結果では、生活機能の自立のための健康状態の維持・改善の促進因子として作用する環境調整については、頻出語の35位に「環境」はあったが、ことばネットワークでは抽出されなかった。このことは、レポート自体が学生の学んだことがそのまま書かれているのではなく、内容的に取捨選択されたものが

記述されていることや、提出先に配慮した内容になることの影響と考えられる。よって、実習の学びをレポート以外の方法でも確認していく必要があると考える。

【多職種と連携】では、日常生活の情報を多職種で共有すること、その人らしい生き方とはどのようなものかを考えながら、看護職としてどのように役割を果たすのか、多職種が連携するにはお互いの職種の役割を理解した上で協働する必要性を学んでいた。このことについては、桑田ら⁶⁾の介護老人保健施設での学生の学びの報告と同様の結果である。実習の場が高齢者介護施設であり、健康管理を中心とする看護職と生活の援助を中心とする介護職との連携は、頻度も高く、生活の場で情報共有し連携していることが理解しやすかったと考える。

【尊厳を守る】では、介護保険施設は、その人が自分で決めた暮らし方が尊重され、持てる力を活用して生活することを支援する施設である。職員の日々の高齢者へのかかわりから、高齢者の意思を尊重し、ペースに合わせて快適で充実した生活が過ごせるように援助することが大切であることを学んでいた。また、身体拘束しない援助の工夫から、高齢者の尊厳を守り自尊心に配慮した関わりが大切であると学んでいた。

【高齢者に合わせたコミュニケーション】【知識技術を身につける】では、高齢者その人を理解するためのコミュニケーションの重要性や、コミュニケーションで知り得たことから援助につなげることの大切さについて学んでいた。高齢者介護施設では、認知症を持つ入所者もいるため、加齢による変化とともに認知症高齢者への対応も必要である。認知症高齢者とのコミュニケーションについては、学生が困難感を感じている報告が多数ある。しかし今回の結果では頻出語に「認知症」や「困難」の単語は見当たらなかった。これは、実習形態が受持ち制でないことや実

習期間が短いこと、また実習で困ったときに実習指導者にすぐ対応していただいていたことが要因と考えられる。認知症高齢者とのコミュニケーションでは、困難場面について知識を結び付けることや⁷⁾、失われた機能を回復する視点ではなく保たれている機能を維持する視点が重要である⁸⁾ため、今後とも体験と知識を結び付けていくよう指導していく必要がある。

また、異常の早期発見や予防的看護の実践のための観察力、的確なアセスメント力を身につけることが必要であることを学んでいた。高齢者がその人らしい生活を送るためには、高齢者に合わせた個別的なケアを多職種が連携して提供していくことが大切であることを学んでいた。

VI. 結論

高齢者看護学実習 I の実習後の課題レポート「高齢者の健康と生活の自立のための支援のあり方」を分析した結果、学生の学びは【高齢者の特徴に合わせた援助】【残存機能の維持・向上】【多職種と連携】【知識技術を身につける】【尊厳を守る】【高齢者に合わせたコミュニケーション】の6つのグループによって構成されていることが明らかになった。しかし、生活自立の支援のための環境調整や認知症高齢者とのコミュニケーションの困難については出てこなかった。よって、今後は、体験と知識を結びつけることができるようにかかわり、学びを言語化していけるように指導していくことが必要と考える。

VII. 今後の課題

本研究は1校において収集したデータであり、研究結果を一般化するには限界がある。テキストマイニングは、出現頻度の高い単語に注目する手法であるため、出現頻度の低いものでも重要と思われるものの取りこぼしが考えられる。また、今回の分析対象である

レポートは、学んだ内容が表現されている反面、体験や学んだことが取捨選択され、その一部が表現されていると考える。よって、今後は、体験と知識を結びつけることができるようにかかわり、学びを言語化していけるように指導していくことが課題である。

VIII. 謝辞

本研究に際して、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は令和元年度学校法人光星学院イノベーションプログラム（基金）研究等補助金の助成を受けて行った。なお、本研究の一部は、第40回日本看護科学学会学術集会において発表したものである。

引用文献

- 1.内閣府:令和2年版高齢社会白書(全体版)
(2021年9月10日アクセス)
- 2.杉野朋子, 丹羽さよ子:「老年看護学実習」における学びの分析:学生の実習レポートからの分析より, 鹿児島大学医学部保健学科紀要 21, P13-19, 2011
- 3.千葉真弓, 原田美香, 細田江見他, 介護老人保健施設での老年看護学実習における学生の学び, 長野県立看護大学紀要 10, P21-32, 2008
- 4.島田広美, 八島妙子, 佐藤弘美他, 老年看護学の臨地実習で得た学びの分析, 川崎市立看護短期大学紀要, 10(1), P29-36, 2005
- 5.水谷信子監修:最新老年看護学第3版 2021年版, 日本看護協会出版会, 2021
- 6.桑田恵美子, 菅原尚美, 山本和江:老年看護学実習における介護老人保健施設実習での学生の学び, 仙台青葉学院短期大学紀要, 10(2), P13-30, 2019
- 7.森幸弘, 中尾奈歩, 福田峰子他:老年看護臨地実習における学生が認識する老年者とのコミュニケーション困難の内容と要

因, 生命健康科学研究所紀要, Vol.14, P35-
44, 2018

8.池田学：認知症者のコミュニケーション,
高次脳機能研究, Vol.35, No.3, P30-34,
2015

執筆者紹介（所属）

切明美保子（八戸学院大学看護学科講師）

辻村史子（元八戸学院大学看護学科教授）